

小・中学校

平成 17 年 度

教育研究員研究報告書

へ き 地 教 育

東京都教職員研修センター

目 次

一人一人に地域とともに生きる力をはぐくむ教育活動の在り方

◇ 目 次	-----	1
I 研究主題	-----	2
1 主題設定の理由		
2 研究構想図		
II A分科会	-----	4
「コミュニケーション能力を高める指導と評価の工夫」		
1 研究主題に迫る推進プラン		
2 研究の内容と方法		
(1) 研究の仮説		
(2) 育てたい力		
(3) 指導の手だて		
3 調査研究		
4 実践事例 1		
実践事例 2		
III B分科会	-----	15
「郷土愛をはぐくむ指導と評価の工夫」		
1 研究主題に迫る推進プラン		
2 研究の内容と方法		
(1) 研究の仮説		
(2) 育てたい力		
(3) 指導の手だて		
3 実践事例 3		
実践事例 4		
VI 研究の成果と課題	-----	24

I 研究主題

一人一人に地域とともに生きる力をはぐくむ教育活動の在り方

1 研究主題設定の理由

今年度は、「個に応じた指導の一層の充実」の共通主題のもと、特にへき地教育部会では、本研究員の所属校の現状や今までの研究報告書をもとに、へき地にある学校の課題について基礎研究を進めた。その結果、児童・生徒の在籍数やそれぞれの自然・社会・文化の環境に多少の違いはあるものの、全体的に共通の課題があることが分かってきた。少人数学級で固定化されがちな人間関係のため、社会性をはぐくむことが難しくなっていること、情報伝達機器の発達により都市部の様々な情報が入るため、自分が生まれ育ってきた地域に対しての興味・関心や、誇りをもつことが少なくなっていることなどが挙げられる。

そこで本部会では、へき地共通の課題を踏まえ、将来、広い視野に立って行動でき、また、生まれ育った地域を活性化できる人材の育成を目指して、本研究主題を設定した。

(1) 地域・学校の特性

本研究員の所属校や地域は、都市部から離れ、海や山、森林など豊かな自然に囲まれた西部山間及び島しょにある。豊かな自然に恵まれている一方、へき地に共通する問題を抱えているところも多い。交通の便や就職先の関係などから若い人が地域に少なくなり、少子高齢化が急速に進んでいる。各学校の多くは単学級で、しかも学級在籍数も少ない。一方で、地域に住んでいる人々は地元出身者が多く、幼い頃から交流が活発に行われているため、地域の人々のつながりは強い。そのため地域の伝統文化はしっかりと受け継がれている。また、将来地域を支える児童・生徒をととても大切にしているため、学校教育への期待も大きく、学校に協力的な傾向にある。

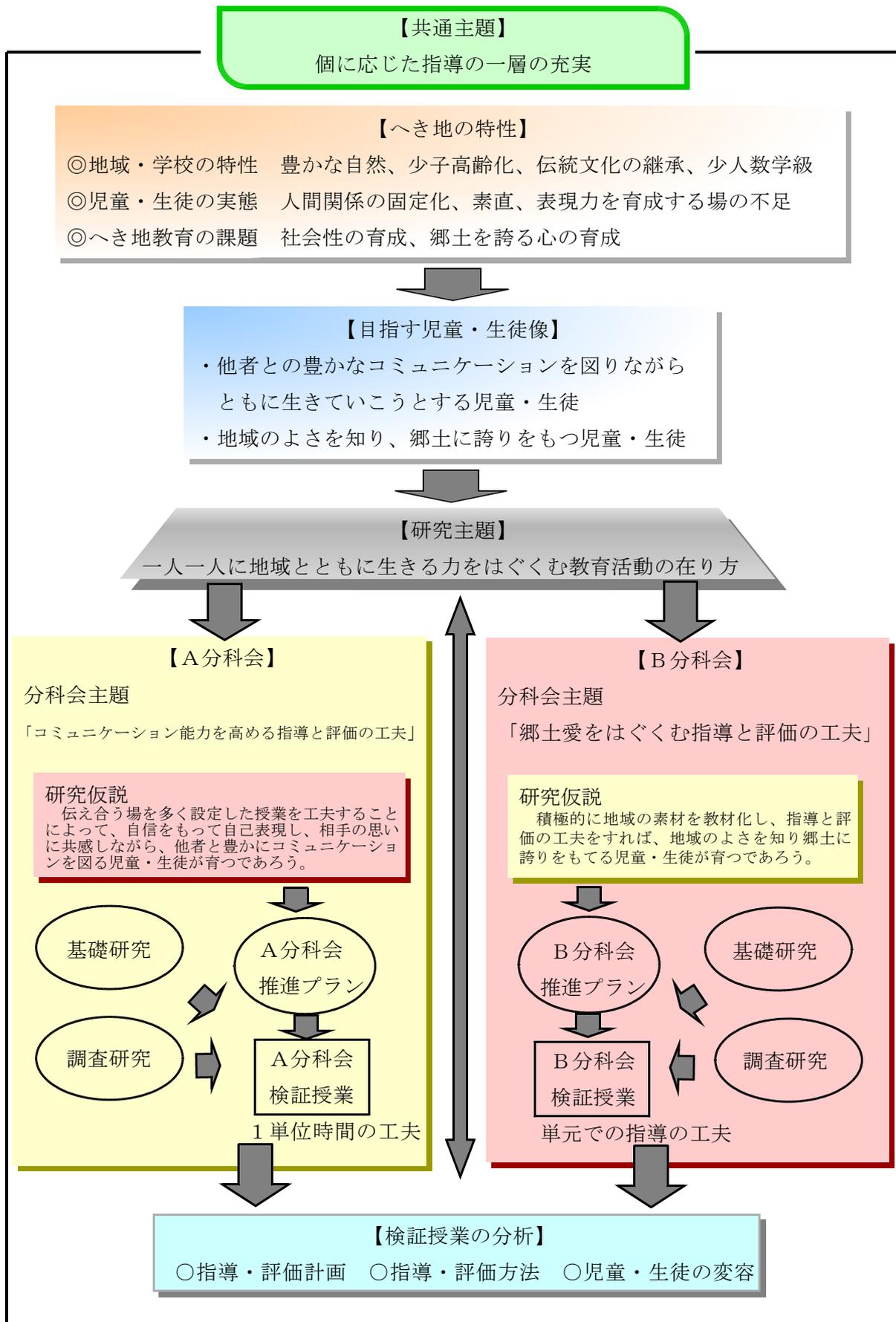
(2) 児童・生徒の実態

へき地にある学校では、多くが単学級でクラス替えもなく、児童・生徒はほとんど固定化された人間関係の中で育っている。また、学校生活以外でも多くの人と出会う機会や、大勢の前で自らの意見を発表する機会が少なく、コミュニケーション能力が育ちにくい面が見られる。また、情報伝達機器の発達にともない、都市部の様々な情報が入り、地域に興味・関心や、誇りをもつことができない児童・生徒もいる。

(3) へき地教育研究の課題

昨年度までのへき地教育研究で研究主題とされてきた「社会性の育成」や「郷土を誇る心の育成」などを踏まえて、将来生まれ育った地域にとどまり、地域を活性化しようとする意識を深めることが重要であると考えた。そのために児童・生徒が改めて地域に興味・関心を持ち、郷土を愛するとともに、豊かな表現力をはぐくむことが課題であると考えた。

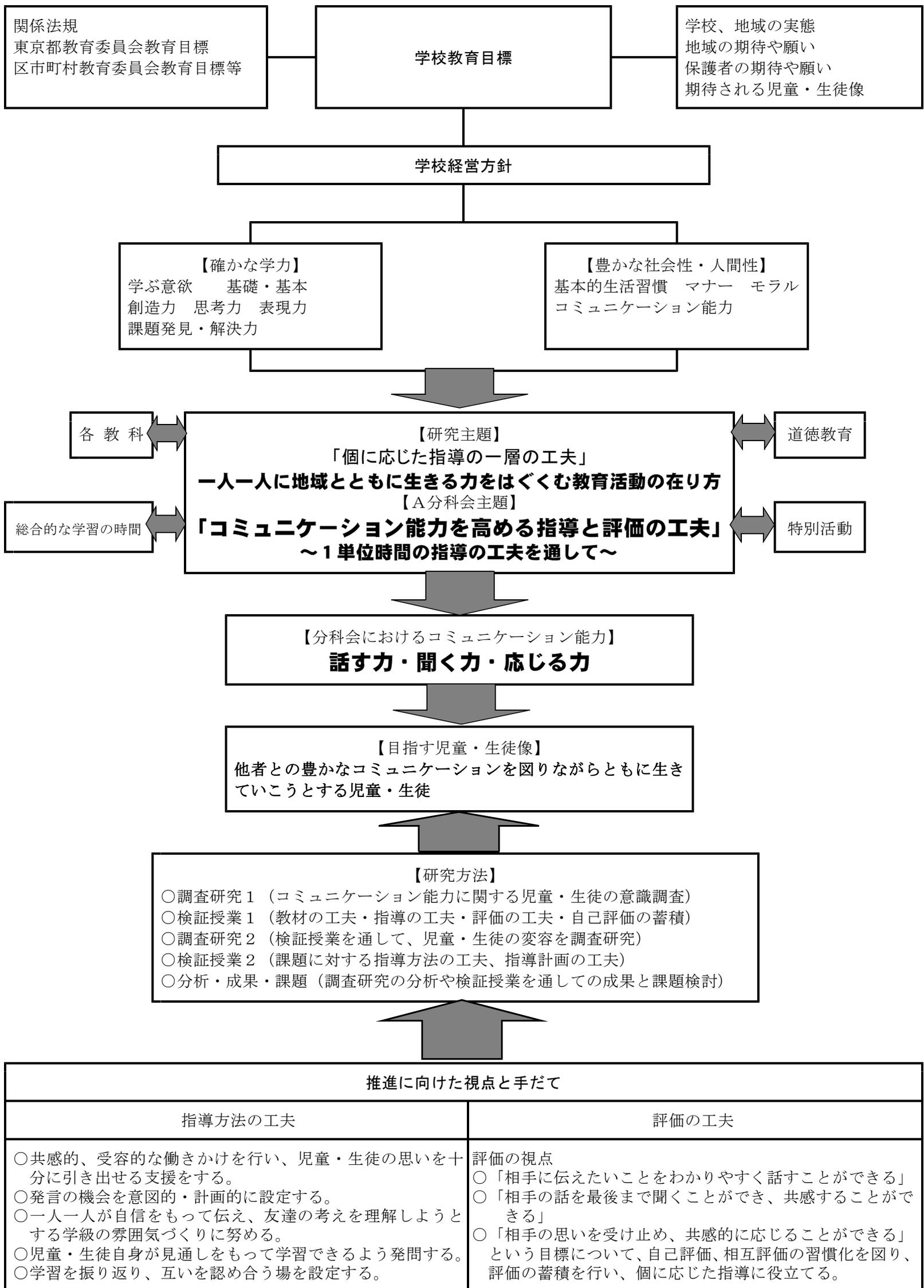
2 研究構想図



Ⅱ A分科会

1 研究主題に迫る推進プラン

【コミュニケーション能力を高めるための推進プラン】



2 研究の内容と方法

平成14年度教育研究員「へき地教育」の「社会性の基礎となる表現力を高める指導法に関する研究」を受けて、課題として挙げられていた各教科等における表現活動を一層充実させることに着目し、将来大きな集団の中でも相手の話を聞き、自分の考えをもち、自分の考えを話すことができる児童・生徒を育てるために、コミュニケーション能力を一層高めることが重要である、と考えた。

本研究では、コミュニケーション能力を「話す力」「聞く力」「応じる力」と位置付け、話し合う場や伝え合う場を意図的・計画的に1単位時間の授業に取り入れ、コミュニケーション能力を高める指導と評価の在り方を探ることを研究のねらいとした。

(1) 研究の仮説

研究を進めるにあたって次の研究仮説を立てて、研究を深めることとした。

話し合う場や伝え合う場を多く設定した授業を工夫することによって、自信をもって自己表現し、相手の思いに共感しながら、他者と豊かにコミュニケーションを図る児童・生徒が育つであろう。

コミュニケーション能力は一方的に「話すこと」だけで身に付くものではなく、自分の思いを話し、相手の思いを「聞くこと」という双方向の活動の中でこそ育っていくものと考え。このような場面を意図的に多く設定した授業の中で、自分の思いを相手にわかりやすく表現し、相手の思いを受け止め「応じること」の経験を積ませることで、児童・生徒のコミュニケーション能力を高めることができると考え、仮説とした。

(2) 育てたい力

将来、大きな集団の中に入れば、それだけ多くの人の気持ちを理解しようとする努力が必要になってくると考えられる。コミュニケーション能力は豊かな人間関係を築いていく上で欠かせない重要な力であり、学習中はもちろん、日常生活においても必要な力になると考える。そこで、コミュニケーション能力のうち、特に育てたい力を以下の3点とした。

- 話す力 (相手に伝えたいことをわかりやすく話すことができる)
- 聞く力 (相手の話を最後まで聞くことができ、共感することができる)
- 応じる力 (相手の思いを受け止め、共感的に応じることができる)

(3) 指導の手だて

ア 指導内容及び個に応じた指導方法の工夫

「話し合う場や伝え合う場」の多くの設定を基本とし、コミュニケーション能力の目標を上記の「話す力」「聞く力」「応じる力」ととらえ、1単位時間の授業の中で必ず設定した。

① 共感的・受容的な働きかけ

共感的なかかわりや受容的な態度、声かけにより、児童・生徒の主体性や一人一人の思いを十分に引き出す支援をする。話すこと、聞くこと、応じることができたことについて、必ず肯定的な評価を積み重ねていく。そして、達成できている状況に応じて、そ

れぞれの内容の充実のための声かけを工夫していく。

② 十分な発言の機会の設定

少人数学級であることの特性を生かし、コミュニケーションの場を意図的・計画的に設定し、1単位時間の中で、どの児童・生徒も発言の機会をもてるようにする。

③ 学級の雰囲気づくり

互いに認め合い、一人一人が自信をもって伝え、友達の考えを理解しようとする学級の雰囲気づくりに努める。

④ 発問の工夫

児童・生徒自身が見通しをもって学習できるよう、分かりやすく効果的な発問をする。また、児童・生徒が自分の考えや思いをもつことができるような言葉かけや、分かる授業を積み重ねていく。

⑤ 振り返り・認め合う場の設定

学習内容や成果について振り返り、互いを認め合う場を設定し、自分の成長を自覚できるようにする。また、振り返りの場において、話す、聞く、応じる活動を取り入れる。そして、コミュニケーションについての振り返りも行うようにする。

イ 評価活動の工夫

「肯定的な評価」を基本とする。

◎自己評価

児童・生徒の主体性を大切にし、自分の学習を振り返り、次時の授業等に生かせるようにしていく。以下の①～⑤を自己評価の視点とした。

①自分が伝えたいことを分かりやすい言葉で話すことができたか。

②友達の話を最後まで聞き、考えや思いを理解することができたか。

③友達の意見を聞いた上で、自分の意見を伝えたり、分からないことを質問したりできたか。

④話し合い活動に積極的に参加することができたか。

⑤話し合い活動にまた参加したいという気持ちになったか。

◎相互評価

友達の学習態度を確認し、評価することで、自分の学習に生かしていくことができるようにする。また、友達の思いに共感できるようにする。

①友達は分かりやすい言葉で話していたか。

②発表の時、友達は最後まで話を聞いてくれたか。

③今日の話し合い活動を通して友達のよいところに気付くことができたか。

自己評価・相互評価ともに振り返りカードを用いて評価し、さらに教師による評価を行う活動を積み重ねることで、コミュニケーション能力の育成を図った。(実践事例参照)

3 調査研究

(1) 調査目的

へき地小規模校における児童・生徒のコミュニケーションにかかわる「話すこと」「聞くこと」「応じること」について、実態調査を行い、現状分析及び課題把握を行うことを目的とした。

(2) 調査対象

小学校3校（児童60名）

中学校2校（生徒32名）

(3) 調査項目

ア 「話すこと」に関する項目

【質問】自分の意見を発表することは好きですか。

【質問】話し合いをするときに積極的に発言しないのは、なぜですか。

イ 「聞くこと」に関する項目

【質問】友達の話聞くのは好きですか。

【質問】話し合いをするときに友達の意見が分かっていますか。

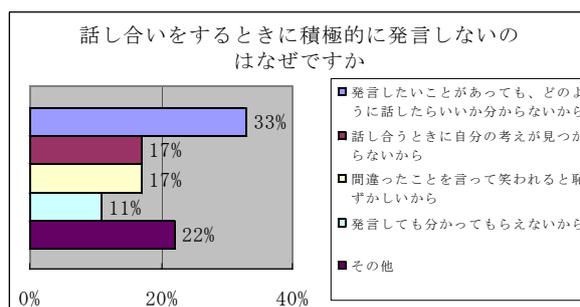
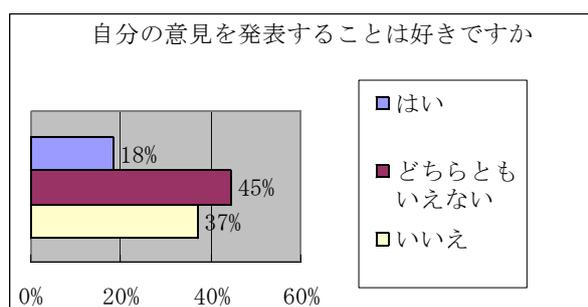
ウ 「応じること」に関する項目

【質問】友達と話し合いをしていて意見が違ったときどうしますか。

【質問】話し合いをしていて分からないことがあったときどうすることが多いですか。

(4) 調査結果と考察

ア 「話すこと」に関する項目



【結果】

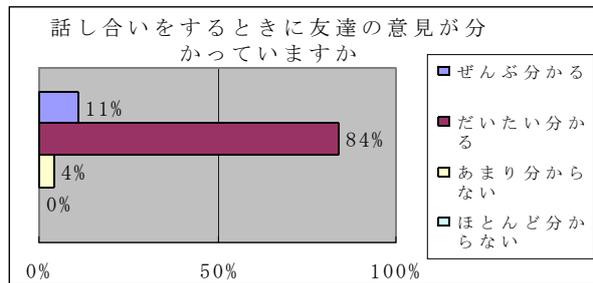
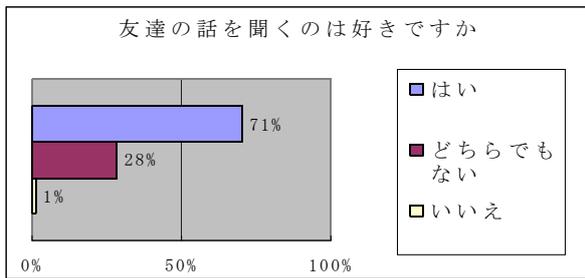
自分の意見を発表することはどちらかというと好きではない傾向にある。「発言したいことがあってもどのように話したらいいかわからないから」「話し合うときに自分の考えが見つからないから」という、自分に要因があると思っている答えが全体の50%を占めている。

【考察】

結果から、自信をもって話すための話し方の指導、自分の考えをしっかりとめさせるた

めの指導が必要であると考えられる。

イ 「聞くこと」に関する項目



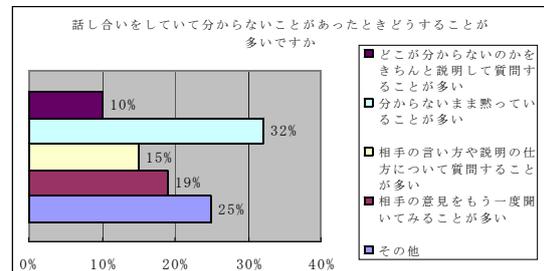
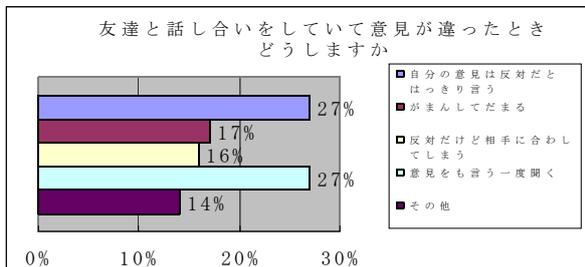
【結果】

話すことに比べて、聞くことの方が好きな傾向にある。また、9割以上の児童・生徒が話の内容をほぼ理解した、ととらえていることが分かる。

【考察】

児童・生徒の自己評価の高さを肯定的にとらえ、更に児童・生徒の「聞く力」を発展させていくために、相手の考えや思いに共感しようとする態度を育てることが必要であると考えられる。

ウ 「応じること」に関する項目



【結果】

「友達と話し合いをしていて意見が違ったときどうしますか」との質問に対し、「自分の意見は反対だとはっきり言う」「意見をもう一度聞く」という積極的な意見が54%を占めている。しかし、「話をしている分からないことがあったときどうすることが多いですか」との質問に対し、「分からないまま黙ってしまうことが多い」という回答が多いことから、話をしている分からないことに関しては、どちらかと言えば消極的な対応をするという傾向にあることが分かる。

【考察】

小規模校でクラス替えが無く、友達に対して意見を言いやすいということも考えられるが、話の内容をしっかりとらえさせ、相手の考えや思いをより深く理解しながら、自分の意見をしっかりとらせる指導の工夫を重ねていけば、コミュニケーションは図りやすく、充実できると考えられる。

4 実践事例

実践事例 1	磁界の中に置いたコイルに電流を流したときにコイルが受ける力の規則性について、自分の考えをもち、発表や話し合いをしようとする指導と評価の工夫	中学校第2学年3名 理科 10月実施
-----------	---	-----------------------

1 単元名 電流とその利用

2 単元の目標

- (1) 磁石や電流による磁界の観察を行い、磁界を磁力線で表すことを理解するとともに、コイルの回りに磁界ができることを知る。
- (2) 磁石とコイルを用いた実験を行い、磁界中のコイルに電流を流すと力が働くこと及びコイルや磁石を動かすことにより電流が得られることを見い出す。
- (3) 電流によって熱や光などを発生させる実験を行い、電流から熱や光などが取り出せること及び電力の違いによって発生する熱や光などの量に違いがあることを見い出す。

3 単元設定の理由

電気は身近なものでありながら、苦手意識のある生徒が多い。この単元においては、電流の強さや電圧の強さの関係、電流による発熱現象や磁気作用などを理解する基礎的・基本的な学習から、電流の働きの理解と発展的な学習に進めていくことをねらいとして本単元を設定した。

4 分科会主題に迫る工夫

- (1) 発表・話し合いの場の設定
 - ア 座席の工夫
積極的に話し合いができるように、お互いの顔を見合い、向かい合った座席にする。
 - イ 話し合いを活発にする工夫
聞く側から発表者の思いや考えに対して、質問することで話し合いをより活発にする。
- (2) 話し合いのスキルを向上させる工夫
 - ア 声の大きさ、聞く態度、発表の仕方を指導し、話し合うことの大切さを意識させる。
 - イ 自分の考えや思いをできるだけ分かりやすく発表できるように、発表方法を選択させるとともに、話し方や聞き方を意識させる。
- (3) 学習材の工夫
 - ア 規則性を導き出すためにワークシートを活用し、自分の考えをまとめやすくする。
- (4) 指導方法の工夫
 - ア 発表では、常に生徒が発表したことを肯定的にとらえると同時に、生徒同士のかかわり合いを重視し、友達の考えや思いに共感できるよう授業を進めていく。
- (5) 自己評価・相互評価の工夫
 - ア 振り返りカードを活用し、話し合いに自分がどのような態度で臨んでいたかを振り返らせる。
 - イ 話し合いの中で友だちのよかったところを発見させ、それをカードに記入させることで、次の話し合いの時間への意欲につなげる。

5 本時の展開

(1) 本時の目標及び評価

ア 教科の目標及び評価

(ア) 磁石の磁界の向きや電流の向きから、コイルに働く力の向きについて規則性を導き出すことができる。【科学的な思考】

(イ) 電流の大きさから、コイルに働く力の大きさの関係を導き出すことができる。

【科学的な思考】

イ 分科会の主題に迫る目標及び評価

(ア) 自分の考えをまとめて、分かりやすく発表することができる。【話す力】

(イ) 友だちの考えを聞き、そのよさに気付くことができる。【聞く力】

(ウ) 質問に正対した受け答えをすることができる。【応じる力】

(2) 本時の展開

	主な学習活動	○ 支援 ●分科会の主題に迫る工夫 ・留意点	☆教科の評価 ★分科会の主題に迫る評価
導入	既習事項(実験結果)を確認する。 本時の目標を確認する。	・授業の流れを示し、見通しをもたせる。	
展開	◎磁界の中に置いたコイルに電流を流したとき、コイルに働く力の向きや大きさについて規則性を導き出す。 ①自分の考えを導き出す。 ワーシートを活用して、コイルの回りに注目させ、コイルに働く力の向きや力の大きさについて規則性を考えてまとめる。 (学習材の工夫) ②自分の考えを発表する。 発表の注意事項・聞くときの注意事項を確認する。 ・発表 ・質問 (スキルを向上させるの工夫) ③3名の話し合いにより規則性をまとめる。(座席の工夫)	 (発表の様子) ○個別に巡回し、進んでいないようであれば磁石の磁界と電流による磁界について既習のワークシートの見直しをさせる。 ・個別に発表方法を選択させる。(ホワイトボード・黒板・紙) ・自分の考えや言葉を大切にさせる。 ●自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞き、質問をしたり、それに応じた回答をできるようにする。	 (個別指導の様子) ☆(ア)【科学的な思考】 ☆(イ)【科学的な思考】 ★(ア)【話す力】 ★(イ)【聞く力】 ★(ウ)【応じる力】
まとめ	①自己評価を記入する。 ②振り返りカードの記入をする。 (評価の工夫)		 (話し合いの様子)

6 成果と課題

(1) コミュニケーション能力を高める課題学習について

事前調査の結果、「自分の考えや意見を発表することが苦手である」と考えている生徒が多い傾向にある。自信をもって発表できるようにするためには、自分の考えをもつことが大切であると考えた。本授業ではそこに重点を置いた課題学習を考えた。既習事項を確認して規則性を見出す内容においてワークシートを活用したところ、自分の考えを導き出すことができた。

生徒の考え方はおおむね同じような考えであったが、発表形態は、2名がホワイトボード、1名が黒板を選択した。既習事項を振り返りながらワークシートを活用して自分の考えをもたせ、発表形態の選択を行うことにより、生徒は主体的に、自信をもって発表することができ、生徒のコミュニケーションに対する意欲が高まったと考える。

一方、自分の考えがもてても、発表に適した声の大きさや分かりやすく伝えることに難しさを感じた生徒もいた。また、発表内容について質問に正対した受け答えをするという「応じる力」については、的確なことばが見つからず戸惑っている生徒も見られた。日頃からコミュニケーションへの意欲を高め、「話し方」「聞き方」の方法を習得することの必要性を感じた。

(2) コミュニケーション能力を高める指導について

事前調査でも、「聞くこと」に関しては意欲的にとらえているが、「話すこと」については、苦手意識があることから、各単元ごとに意図的・計画的に伝え合う場や話し合う場の設定が重要であると考えた。

しかし、場の設定を行っても自分の考えや思いをもつことができない生徒は、発表につながっていかない傾向にある。生徒が自分の考えをもつための指導が重要であり、「生徒が分かる授業」の展開と、生徒の学習の状況を詳しく見取り、個に応じた指導を重ねることが大切である。

本授業では、単元を通して1単位時間の最初にその時間の目標を示し、まとめには、必ずその目標に戻ることを心がけた。また、個による理解度に違いがあり、個に応じた指導計画を立てて取り組んだ。その結果、全員が基礎的・基本的な事項をおさえ、それらに関連付けながら自分の考えを導き出すことにつながり、発表や話し合いまで展開できたと考える。

小規模校における課題として、コミュニケーション能力の向上は重要であり、各教科等における様々な場面で計画的に指導していくことが改めて重要であると感じた。

(3) コミュニケーション能力を高める評価について

本分科会では、コミュニケーション能力の向上をねらいとして、授業後に「振り返りカード」の記入をさせ、生徒の変容をとらえるように努めた。自己評価とともに、相互評価を取り入れ、友達の実現方法のよさに気付かせるようにした。

話し合いの場を意図的に設定するとともに、「振り返りカード」を継続的に活用して自己評価や相互評価を積み重ね、生徒の小さな変容も的確にとらえ、個に応じた指導をすすめていくことが今後の課題であると考えた。

実践事例 2	道徳的な価値について話し合う中でコミュニケーション能力を高める指導と評価の工夫	小学校第 2 学年 8 名 道徳 10 月実施
--------	---	----------------------------

1 **主題名** よわい心 内容項目 1-(4) 正直誠実・明朗

資料名 「シールのせいじゃない」(みんなのどうとく 2 年 学習研究社)

2 主題設定の理由

人は誰もがよりよくありたいと願いながら生活している。しかし、時として思いがけず失敗をしてしまったり、出来心から悪いとわかっている行動をとってしまったことがある。そのような時に、素直に自分の非を認め、悪かったことは素直に認めてあやまることができれば、毎日の生活を明るく気持ちよく過ごしていくことができる。自分の過ちに気付いて深く後悔する主人公に共感させながら、その思いを伝え合いや話し合いの場を通して交換し合うことで、互いの考えをより深めさせたい。

3 分科会主題に迫る工夫

(1) 話し合いの場の設定の工夫

ア 座席の配置

積極的に話し合いに参加できるように全員の顔が見える向かい合った座り方にする。

イ 問い返しの発問

あらかじめ設定しておいた発問だけでなく、反応によって考えをさらに深めさせるための問い返しの発問をすることで、話し合いをより活発にする。

(2) 話し合いのスキルを向上させる工夫

ア 聞き方の約束

『話をしない』『じっくりと聞く』『相手を見る』『心で感じる』を聞く時の約束として掲示し、意識させる。

イ 声のものさし

自分の意見を相手に伝えるために適切な声の大きさを確認する。

ウ サインによる意見の表明

自分の意見を述べた児童の意見に対して賛成か反対か、あるいは付け足しがあるか等をよく考えて全員が反応するように指導し、友達の意見をよく聞くようにさせる。

エ 相互指名

自分の考えに対する友達からの意見を聞くことで、児童同士が一人一人の思いを大切にし、考えを深め合えるようにする。

(3) 資料提示の工夫

ア 場面絵での資料提示

資料を範読するだけでなく、場面絵も提示して資料への理解を深めさせ、自分の考えをしっかりともてるようにする。

(4) アンケートの活用

ア 事前のアンケート

話し合いの活動に対する意識調査を事前に行って、一人一人の実態をとらえ、よりこまやかな個別指導ができるようにする。

イ 事後のアンケート

授業を行った後で、児童の話し合い活動に対する意識がどのように変容したかを知ることによって、その手だてが有効であったかを検証するとともに、授業後の事後指導に役立てるようにする。

4 指導の実際

(1) 本時のねらいと評価

ア 教科等としてのねらいと評価

悪いことをしたら素直にあやまり、明るい気持ちで誠実に生活しようとする心情を育てる。

イ 分科会の主題に迫るねらいと評価

(7) 自分の意見を相手にわかるように話すことができる。【話す力】

(イ) 相手の意見に興味をもち、大切なことを落とさずに聞くことができる。【聞く力】

(ウ) 仲間と友好的な態度で話し、相手の意見に応答することができる。【応じる力】

(2) 本時の展開

	学 習 活 動	●分科会主題に迫る工夫 ・指導上の留意点	☆評価 ★分科会主題に関わる評価
導 入	1. シールやカードを集めた経験を想起し、そのときの気持ちを発表する。	●お互いの顔が見えるよ うな座席の配置にする。	
展 開 I	2. 資料「シールのせいじゃない」を視聴し、話し合う。 ①お母さんの財布からお金をとろうとしてみつかったとき、ぼくはどんな気持ちだったでしょう。 ②お母さんに「わけを話さない」と言われたのに、下を向いて黙っていたぼくの心の中は、どんな様子だったでしょう。 ③「 <u>どろぼうみたいな人は出ていって</u> 」と言われ、 <u>玄関の前でぼくはどんなことを考えていた</u> のでしょう。	●話の内容をしっかりと理解できるように、資料提示の仕方を工夫する。 ●スキルを生かして、相手の意見を最後まで聞き、自分の意見を言えるよう支援する。 ・主人公の心中をじっくり考えさせ、十分話し合わせる。 ●自分はどう思うのか、またそう思った理由をはっきりと言わせる。 ・考えがより深まるような切り返しの発問をする。	★自分の意見をもち、相手にわかるように話すことができる。【話す力】 ★相手の意見に興味をもち、大切なことを落とさずに聞くことができる。【聞く力】 ★サインでの『つけたし』『賛成』『反対』などを使い、相手の意見を受けた上で応答できる。【応じる力】 ☆主人公の苦しい胸中に共感できる。 ☆主人公の気持ちに共感しながら意見を言うことができる。

展開Ⅱ	3. 今までの自分を振り返りながら主人公に手紙を書く。	・単なる手紙ではなく、自分への反省と重ね合わせながら書けるように声かけをする。	☆悪いことをしたら素直にあやまろうとする気持ちが文章に表れている。
終末	4. 教師の説話を聞く。	・実践への意欲を高める。	

5 成果と課題

(1) 成果

場の設定の工夫では、お互いの顔がよく見える座席配置にしたため、相手の顔をしっかりと見て意見を聞いたり、話す時にはみんなの顔を見ながら自分の考えを投げかけるように話したりすることができた。また、問い返しの発問をすることで、児童の思いをより深めさせ、児童にとってお互いの意見をじっくりと聞き、理解する助けとなった。さらに、聞き方の約束、声のものさし、サインによる意見表明などのきまりを低学年の児童に分かりやすく図や絵で表して教室前面に掲示したことで、どの児童にも視覚的にとらえられ、容易に理解することができ、話し合いの中で十分に生かすことができた。意見を言う時に、掲示してあるきまりを見て、自分の話し方の確認をしている児童の姿が見られた。

このような活動を通して、なかなか発言できなかった児童が少しずつ自信をもって発言できるようになってきたのは大きな成果である。また、自分の意見は述べるものの、他の児童の意見をなかなか聞こうとしなかった児童が、サインを使った話し合いを通して、相手の意見も大切に聞こうとする意識がもてるようになってきた。

(2) 課題

児童が発言した後で、同じことを教師が簡略化して復唱してしまった場面があった。聞く力を身に付けさせるためには、「一度しか聞けないからしっかり聞かないといけない。」ということ児童に意識させ、教師が復唱しないように意識したい。また、発問に対応しない児童の意見をうまく学級全体に広げて話し合いを深められなかった場面があった。児童の意見が発問に正対していない場合には、教師が問い返しの発問をすることでねらいに近づけることもできるので、どのような意見も大切に扱い、問い返をしながら、より深くねらいに迫っていけるような支援の工夫をする。

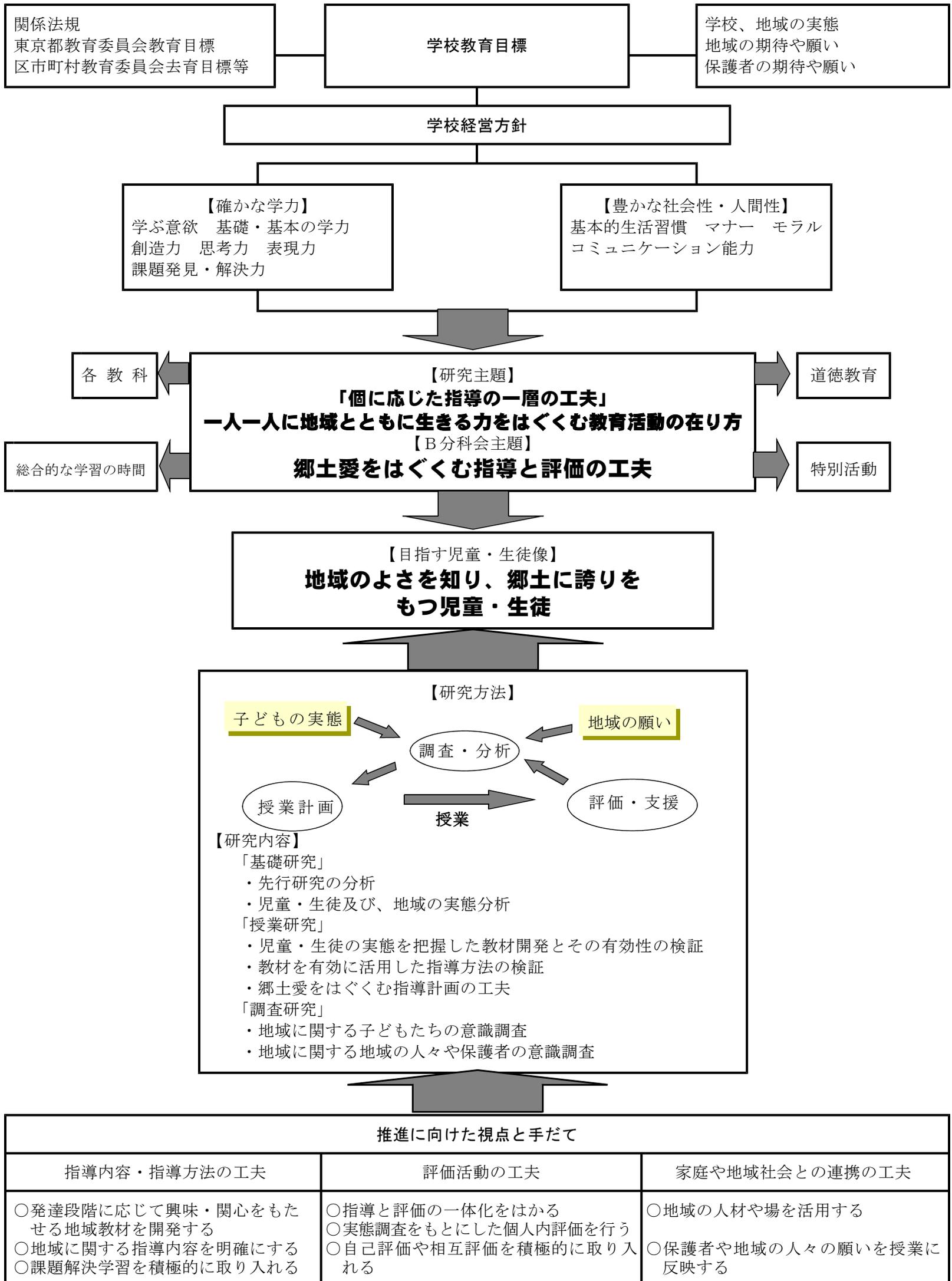
話し合いのスキルを活用しながら話し合うという形式だけでなく、お互いを大切に、心情面を大切にしながら話し合いの活動を重ねることで、共によりよく生きていこうとする意欲が高まると考える。

また、コミュニケーション能力を高めるためには、より多くの人からたくさんの意見を聞くことが必要である。学校の規模が小さく、周囲との交流が少なくなりがちな地域にある学校だからこそ、他学年の児童と話し合う場を意図的に設定したり、通信機器等を用いて他校の児童の意見を聞いたり、地域の人々とのかかわりを深めて意見交換をしたりするなど、より多くの人との交流を図っていくことが重要であると考える。

Ⅲ B分科会

1 研究主題に迫る推進プラン

【郷土愛をはぐくむ指導と評価の工夫のための推進プラン】



2 研究の内容と方法

本分科会では、先行研究の分析を行い、地域の人々から、地域に根ざした人材の育成を求められていることから、へき地教育においては、地域のよさを知り、郷土に誇りをもつ人材を育成していくことが大切であると考えた。そのためには、児童・生徒が興味・関心をもてる地域の教材を開発し、指導と評価の一体化を図りながら、児童・生徒の地域への思いを深める必要がある。そしてその中で、将来、郷土を活性化しようとする人材を育てることを研究のねらいとした。

(1) 研究の仮説

部員の所属校の児童・生徒は、地域への所属意識や愛着が強く、地域の活動にも積極的に参加している実態があるものの、実際には、自分の住んでいる地域のことについては知らないことも多い。そこで、分科会主題に迫るために、次のような仮説を設定した。

積極的に地域の素材を教材化し、指導と評価の工夫をすれば、地域のよさを知り、郷土に誇りをもてる児童・生徒が育つであろう。

生まれ育った地域としての「郷土」を愛する感情は人間が生まれながらにしてもっている自然であたたかな感情であると考え。この感情を一人一人の心にしっかりと根付かせていくためには、地域のよさを知り、児童・生徒が興味・関心をもつことができる教材を活用した学習を、継続的、発展的に行うことが大切であると考えている。

(2) 育てたい力

郷土への思いを深めていくためには、自分が生まれ育った地域での体験を重ね、意識付けをし、地域のよさを感じとり、地域への感謝の心を育てていくことが大切である。そのために発達段階を考慮して次のように育てたい力を設定した。

ア 地域に対する関心をもつ力

自分中心の世界から一步踏みだし、自分が生活している地域に目を向ける。すなわち自分の世界を広げていく段階。

イ 地域のことを学ぶ力（情報収集力、郷土理解力）

地域のよさを知り、その結果、地域が好きになったり、地域に必要なことは何かを思考したりする段階。

ウ 地域と自分のつながりを考える能力

地域の行事に参加したり、地域の人々との交流を深めたりする中で、自分が地域に対してできることは何かを考え、よりよい地域をつくろうとする意識をもつ段階。また、郷土に対して誇りを持ち、将来、郷土の活性化に貢献できる力を身に付ける段階。

(3) 指導の手だて

育てたい力を育成するための指導の手だてを次のように設定した。

ア 指導内容・指導方法の工夫

(ア) 地域教材を開発する

- ① 総合的な学習の時間では、地域の方の講演や調査活動におけるインタビュー、アンケート等を通して地域の方とかかわり、興味・興味をもたせるように努める。
- ② 中学校国語科では、意見文の題材として、「自分の住んでいる地域への提言」を取り上げる。それによって、生徒の地域への関心をもたせ、地域をよりよくしようとする意識をもたせるようにする。
- ③ 道徳では、地域の実態に合わせた自作資料を活用し、児童・生徒がねらいとする価値に共感しやすくする。

(イ) 地域に関する指導内容を明確にする

教科等の学習において、「地域」とのかかわりを意識して指導を行う際には、教科等のねらいからそれないように配慮し、地域に関する指導内容と取り扱う指導過程を明確にする。

(ウ) 体験学習を中心とした課題解決学習を取り入れる

- ① 総合的な学習の時間では、地域にかかわる調査や地域とかかわる活動を位置付け、一人一人に課題意識をもたせ、解決への意欲を高めさせる。
- ② 道徳では、授業後、学習内容を総合的な学習の時間と関連付けて発展させ、一人一人が地域に対する新たな課題意識をもって取り組めるように工夫する。

イ 評価活動の工夫

(ア) 評価項目を明確にする

地域に関する指導に対しての評価項目を明確にすることで、身に付けたい力を焦点化させるとともに、地域に対する思いや、考えの深まりをとらえやすくする。

(イ) 指導と評価の一体化を図る

診断的、形成的評価を積極的に活用し、継続的、発展的に次の段階の指導への移行へと活用していく。

(ウ) 実態調査をもとにした個人内評価を行う

単元の最初と最後にアンケートを行い、地域に対する思いがどのくらい深まったのか児童・生徒の変容を見取る。

(エ) 自己評価や相互評価を取り入れる

振り返りカードで自己評価を行わせることにより、自分がどのような態度で学習に臨んでいたかを振り返らせ、次の学習の意欲につなげる。また、相互評価させることにより課題をより明確にし、さらに学ぼうとする姿勢につなげる。

ウ 家庭や地域社会との連携の工夫

(ア) 地域の人材や場を活用した授業の工夫を行う

児童が、学習活動の中で、地域の方の話や活動を聞く活動から、地域のよさに共感しやすくさせる。また、教師が地域の人々との交流を行い、資料収集や学習材の作成に役立てることができる。

(イ) 地域に関するアンケートを教育活動に生かす

保護者や地域の人々からもつ地域への思いを理解することにより、今後の授業の指針とし、地域にかかわる指導内容を地域に発信することで、連携を深める。

3 実践事例

実践事例 3	地域の課題を知り、郷土を愛する心を はぐくむ指導と評価の工夫	中学校第2学年 22名 総合的な学習の時間 4～9月実施
-----------	-----------------------------------	---------------------------------

1 単元名 「奥多摩の現状を調査しよう」

2 単元の目標

- (1) 奥多摩の課題に関心をもち、課題設定や探究活動に主体的に取り組む態度を育てる。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、よりよく問題を解決していく力を養う。

3 単元設定の理由

奥多摩町は、緑に囲まれた自然の豊かな地域である。そのため、地域で育った生徒の奥多摩町の印象は「自然が豊富でとてもよい」というとらえ方をしている。しかし、奥多摩町の現状は、町の高齢化、人口減少に伴う収入減、動物による自然被害など様々な問題がある。そして、多くの生徒がこの実態を知らない。そこで、奥多摩町の現状を多面的にとらえるために、一人一人が奥多摩の課題を知り、テーマを設定し、調査し、発表する。生徒同士の発表を聞き合うことにより、情報の共有化を図り、奥多摩町の現状を知り、地域への関心を高めたい。

4 分科会主題に迫る工夫

(1) 指導内容・指導方法の工夫

奥多摩のよいところを理解するとともに、奥多摩の課題を知る。実際に一人一人が調査し、奥多摩の現状を理解する。情報を共有し、様々な課題を含めた地域のよさを理解し、それをもとに自分が生まれ育った郷土の未来を考える活動を取り入れる。課題設定から学習のまとめまで生徒一人一人の活動として、それぞれの思いをじっくりと深めさせるとともに、個別指導をこまめに行い、学習状況の把握を十分に行う。

(2) 評価活動の工夫

生徒の実態を把握し、それを診断的評価し、指導内容・指導方法の計画を立てる。自己評価・相互評価を参考にし、指導と評価の一体化を図る。単元の終わりに活動を振り返り、地域に対する心情が深まったか評価する。

(3) 家庭や地域社会との連携の工夫

奥多摩の課題を地域の人々に多角的に話をしてもらうことによって、生徒に地域に対する興味・関心をもたせる。また、地域の人々とかかわりを持ちながら、調査活動を行うことによって、地域に対する思いを深める。

5 指導計画（25時間扱い）

時	学習活動	○支援	☆教科等に関する評価
		●分科会主題の工夫 ・留意点	★分科会主題に関する評価
1	・学習内容「奥多摩の現状を調査しよう」と学習のねらいを知る。	・特に学習のねらいを明確に説明する。	☆学習内容とねらいを理解し、主体的に取り組もうとしている。
2	・地域の方の講演会（奥多摩の様々な課題）を聞くにあたって、一人一人が仮説を立てる。	○仮説の立て方を例を挙げて説明する。	☆他者の意見も参考にし、仮説を立てることができる。
3		●奥多摩の長所だけでなく、短所も考えさせ、課題を予想させる。	
4～6	・講演会を聞き、奥多摩の様々な課題について知る。	・奥多摩の課題について多角的な話となるよう、事前の打合せを十分に行う。	★奥多摩の現状を知り、地域に対して興味・関心をもつ。
7	・講演会を受け、奥多摩に関する学習課題を設定する。 ※講演会の内容を参考にし、学習課題は自分で考える。	○講演会や他者の意見を参考にし、興味をもったことから課題を設定するようにさせる。	☆講演会や他者の意見を参考にし、主体的に課題を立てることができる。 ☆課題設定理由が明確である。
8			
9	・課題から地域の方とかかわる調査方法を選択し、計画を立てる。	・何を調べたいのかを明確にさせ、調査方法が適切かどうか判断させる。	☆課題に対して、適切な調査活動を選択することができる。
10			
11	・夏休みの調査活動に向け、準備をする。（インタビューやアンケート内容等）	○調査内容からずれないように常に注意させ、こまめに個別指導を行う。	☆調査活動の準備を主体的に行うことができる。
12			
13			
14	・アポイントやインタビューの際の礼儀を知る。	○正式な電話対応の仕方やあいさつ、言葉遣い、お礼の仕方を伝える。	☆マナーを身に付けることができる。
夏休み	・調査活動をする。		★地域の人々とかかわりを通して、奥多摩に対する思いをもつ。
15	・調査活動で得た情報をまとめる。	○得た情報を、自分の課題をもとに取捨選択させる。	☆情報を適切に取捨選択できる。
16			
17	・得た情報をもとに、自分が感じたことや奥多摩に対する思いを書き、他者に伝える。（中間報告会）	●自分が感じたことだけでなく、奥多摩に対する思いについても書かせる。	★調査活動で得た情報や奥多摩に対する思いを他者に伝えることができる。
18			
19			
20	・他者に伝えたい内容をまとめ、発表準備をする。	○他者に伝えたい内容を明確にするために、課題と課題設定理由を振り返らせる。	☆主体的に、発表準備をしている。
21			
22	・発表する。	○発表に関する自己評価・相互評価をさせる。	☆発表内容・情報発信手段が適切である。
23			
24	・活動を振り返る。	●調査活動に対する自己評価をさせる。	☆主体的に活動し、学習スキルが身につけている。
25	・今年度の調査をもとに「10年後住みたい町奥多摩」に向け、大まかな活動内容を考える。	・自分の奥多摩に対する気持ちの変化をまとめる。 ○個別指導により、一人一人の学習状況の把握をし、評価する。	★他者の発表を聞き、奥多摩の現状をより理解し地域への思いが一層高まる。

6 成果と課題

(1) 指導内容・指導方法について

本単元の導入で、生徒が奥多摩をどのようにとらえているのか実態調査を行った。自然が豊富であることをほとんどの生徒が挙げ、中には「何の問題もない。今の奥多摩のままでもよい。」と答えた生徒もいた。そこで、奥多摩について、より興味・関心を高めるために、現在の奥多摩の課題についての講演を地域の人々に依頼した。多くの生徒が奥多摩の現状を知り、驚きとともに興味・関心をもつことができた。また、今回一人一人に課題を解決する力を身に付けさせるために、個別で課題を設定し、まとめまで行った。T Tを活用し、個別指導も数回行い、それぞれの学習状況のこまめな把握に努め、一人一人が学習の見通しをもち、課題解決を最後までやり遂げることができた。これは、小規模校であるからこそ、こまめな個別指導がより可能となった実践であると考えられる。

(2) 評価について

学年体制でT Tを行ったため、個々の生徒の学習状況を把握し情報交換し合い、個に対する指導と評価の一体化を図ることができた。また、単元の始めと終わりに、奥多摩に対する思いについて生徒に考えさせた。その中で多くの生徒の地域に対する思いや願いが深まっていることが分かった。

一方、相互評価の活用の課題が残った。今回、アドバイスカード等を用いて相互評価を行ったが、単元の終末での活用が多く、定期的に行わなかった。そのため、友達の意見が自分の活動にあまり反映されず、相互評価を有効に活用できなかった。また、一人一人で活動したため、学習の過程で友達の活動状況を知ることが少なく、自分の調査内容や活動を客観的に判断することができにくかった。今後は友達のよいところを学び、自分の活動をより改善させるための場を定期的に取り入れることが必要である。

(3) 家庭や地域社会との連携について

今回、奥多摩に対する心情を深めるために、地域の人々とかかわりをもつ場面を多く設定した。特に、最初の講演会は地域に対する思いが深く生徒の心に響き、印象に強く残った。また夏季休業中には、個別指導をこまめに実施しながら、地域の人や地域で働く人の気持ちを直接聞く調査活動を行うことができた。

今回の学習内容を直接お世話になった地域の人々に報告する時間が設定できなかった。奥多摩に対する心情をさらに深めるためにも地域への発信の時間が必要であると考えられる。

(4) 全体を通して

郷土を愛する心をはぐくむことを目標に、今年度は地域に関心をもち、地域の未来の在り方への思いを一人一人が発言できるように指導した。具体的には『個に応じた指導の充実』のもと、様々な場面でT Tを取り入れ、こまめに生徒一人一人の活動状況を把握し、支援と声かけの評価を重ねた。また、地域の課題について地域の人々とかかわりながら調査することによって、改めて地域のよさに気づき、地域に対する思いも高まった。今後は、今年度の学習をもとに、他の地域との比較やかかわりを通して、郷土に誇りをもち、『10年後住みたい町奥多摩』を一人一人が提言できるように継続的、発展的に学習を展開することが課題である。

実践事例 4	教科指導の中での生徒の地域への思いを深めるための指導・評価の工夫	中学校3年生 4名 国語科 12月実施
--------	----------------------------------	------------------------

1 単元名 『主張文を書こう』

2 単元の見目標

- (1)自分の考えを客観的に見つめ、主張することでわかり合う喜びを味わう。
- (2)さまざまな立場や考えを想定し、根拠を明確にして主張する文章を書く。

3 単元設定の理由

「書くこと」の領域における中学校のまとめの単元として位置付け、これまで取り組んできた「感想文」「レポート」「意見文」からの統合・発展を図ることをねらいとする。

生徒には「主張文」を書かせることで、読み手の立場や意見を想定しながら自分の考えを表現する力を身に付けさせたい。そのために、読み手と書き手の「伝え合い」の場を設定し、物事に対してさまざまな視点から多角的に認識する態度を育てるようにする。

4 分科会主題に迫る工夫

- (1) 主張文の題材として、「自分の住む地域への提言」を設定する。それによって、生徒の地域への関心をもたせ、地域をよりよくしようとする態度をはぐくむ。
- (2) 互いの文章を読み合い、意見交換をすることで、地域に対する自分の考えを深める。
- (3) 単元の最初に地域に関する意識調査を実施し、その結果をふまえ、地域への思いを深めるための個に応じた支援を行う。

5 指導計画（6時間計画） ※【関：関心・意欲・態度】【話：話すこと】【書：書くこと】

時	学習活動	○支援 ●研究主題の工夫 ・留意点	☆教科等に関する評価 ★研究主題に関する評価
第1次 (2時間)	御蔵島に関する意識調査をする。 意識調査の結果を参考に、「主張（御蔵島への提言）」を一文でまとめる。	●意識調査用紙を用意する。 ○主張をまとめられない生徒に、助言を与える。	★御蔵島のよさや課題について考えようとする。(C→島の好きなどところ・改善したいところを思い起こさせる) ☆ (関①) 自分なりの主張を一文にまとめようとする。(C→「わたしは御蔵島に○○になってもらいたい」の空欄に言葉を入れさせる)

<p>第1次 (2時間)</p>	<p>主張を発表し、意見を交換し合う。</p>	<p>○お互いの主張に対して意見を促す。 ○出された意見は、メモを取るように指示する。 ○意見交換の様子を板書する。 ●<u>意見交換の中で、生徒が御蔵島のよさや課題について深く考えられるように話し合いの活動を行う。</u></p>	<p>☆ (話①) 他者の主張に対して自分の考えを述べたり、他者の意見を自分の考えに取り入れたりすることができる。(C→他者の主張への肯定・否定を明確にさせる) ★<u>「御蔵島への提言」を、複数の視点から考えられる。(C→主張に対する反論を示す)</u></p>
<p>第2次 (2時間)</p>	<p>主張文の材料を考え、カードにまとめる。 カードを並べ替え、構成を考える。 カードを使って考えた構成を基に下書きを書く。</p>	<p>・「事实用」「意見用」「反論用」の3種類のカードを用意する。 ○読み手が村民や学校の後輩であることを意識させる。 ○必ず3種類のカードを使うように支援する。 ○教科書の文章構成図を参考にさせる。 ○必要に応じて、カードを加えさせる支援をする。 ○段落・段落の接続・明確な言語の使用を意識させる。</p>	<p>☆ (関②) 意見交換で出された意見を取り入れようとする。(C→意見交換で出た意見に取り入れられるものがないか確認させる) ☆ (書①) 筋の通った、論理的な構成を考えることができる。(C→主張と根拠となる事実・意見との関係が、正しく関連するよう助言する) ★<u>御蔵島への思いを主張文の中に表せる。(C→自分が御蔵島の将来に期待する事を考えさせる)</u></p>
<p>第3次 (2時間)</p>	<p>主張文を発表し、意見交換を行う。 意見交換された内容を参考に清書する。</p>	<p>・評価用紙を用意する。 ○発表前に評価の視点を示す。 ○意見交換された内容が主張文に反映されるよう、机間指導を行う。</p>	<p>☆ (関②) 意見交換された内容を清書に反映させようとしている。(C→意見交換の内容を、自分の主張と同調・対立した意見に整理させる) ☆ (書①) 自分の主張に対立する視点も盛り込んだ主張文が書ける。(C→カードを使って、構成を再確認させる)</p>

6 成果と課題

(1)成果

- ・ 主張する文章の題材として、身近な地域のことを共通に取り上げることで、生徒は学習への意欲を高め、よりよいを主張文を書こうとする姿勢が見られた。生徒は、多くの場合、自分の地域に少なからず関心をもっており、地域に関することを教材化した場合、その意欲を高める効果があることが分かった。
- ・ 単元の最初に行った地域に関する意識調査から、生徒の地域への関心の高さ、思いの深さを知ることができた。生徒の多くは地域を「好き」と回答し、その理由も複数挙げることができた。生徒の地域への興味・関心について教師が把握するために、発達段階に応じた意識調査は効果的であることが分かった。
- ・ 意識調査の結果をもとに、生徒同士に意見交換を行わせることで、生徒の地域への見方を広げ、より深めることができた。生徒はそれぞれ、「自らの思いを言葉にして表現すること」、「自分の考えに対する友達の考えを聞くこと」、「友達の考えに対する自分の意見を表現すること」の3つの活動を通して、地域に対する自分の考えを確立することができ、地域への思いを深めることができた。
- ・ 意見交換では、生徒の発言のほとんどすべてが、地域のよさの指摘や、問題点を挙げていても、それをよりよく改善するための視点が示されている等、地域を大切にしようとする意識がうかがえた。話し合いの活動の状況を詳しく見取ることにより、一人一人の生徒の変容をとらえることが可能となった。これは、小規模校であるからこそ、実践可能なことであると考えられる。
- ・ 地域への思いの高まりとともに、それを表現したいという生徒の表現への意欲も高まり、教科のねらいの達成に相乗的な効果があった。
- ・ 学習指導計画を作成する段階で、教科の指導内容及び評価計画と、地域に関する指導内容及び評価計画を明確化したことで、指導すべき、また学習すべき明確なねらいをもって、教師及び生徒が学習に取り組むことが可能となった。

(2)課題

- ・ 「地域への思い」という指導内容自体が抽象的な観念であるため、それがどの程度生徒に定着したのかをはかる規準が不明瞭になってしまう。生徒一人一人によって、大きく考え方の違いが見られやすい内容であり、身に付けさせたい地域にかかわる力についての評価の視点を明確にする必要がある。
- ・ 生徒は本来、慣れ親しんだ地域に対する愛着をもっているものと考えられる。特にへき地のように、生徒が地域と密着して生活している場合、その傾向が顕著であると考えられる。それをさらに深めていくための継続的、発展的な指導の工夫を行っていく。
- ・ 各教科等における指導を行う際、その単元での教科等の指導内容と、地域に関する指導内容とを計画段階から明確に区別し、どの学習過程において何を指導するのかをより明確にし、指導計画を充実させていく必要がある。

IV 研究の成果と課題

本年度のへき地教育部会では、「一人一人に地域とともに生きる力をはぐくむ教育活動の在り方」という研究主題のもと、「コミュニケーション能力」と「郷土愛」の視点から研究を進めた。各分科会の研究の成果と課題について述べる。

1 研究の成果

(1) A分科会「コミュニケーション能力を高める指導と評価の工夫」

まず、調査研究の結果から、調査対象の児童・生徒は他の人の話を聞こうとする意欲があり、重要なのは、コミュニケーションを図る場の工夫とコミュニケーションを図る活動の積み重ねであることがわかってきた。そのことを踏まえ、コミュニケーション能力を、「話す力」「聞く力」「応じる力」の3つに整理してとらえることにより、指導内容を焦点化しやすくなった。

検証授業では、「思いや考えが表現できる場の設定」をすることを基本とし、いくつかの工夫を行った。調査研究の結果からも、「話すこと」を苦手とする児童・生徒が多いが、教師の共感的、受容的な働きかけや発言の機会を意図的・計画的に設定することで、多くの児童・生徒は、安心して発言をすることができるようになった。そのような場を積み重ねていくことで、徐々に「話すこと」に対する苦手意識が払拭され、意欲的に発言をすることができるようになってきた。また、教師が発問を工夫し、児童・生徒自身が見通しをもって学習できるようにすることで、自分の考えを発言しようとする姿勢や、筋道をたてて相手に伝えようとする姿勢が見られるようになってきた。

評価活動においては、「肯定的な評価」を基本とすることで、児童・生徒の意欲を引き出すことができた。

(2) B分科会「郷土愛をはぐくむ指導と評価の工夫」

基礎研究として、学習指導要領の内容から地域及び郷土の内容にかかわる項目を整理したところ、現状では限られた教科等でのみ扱われていることが分かった。そこで検証授業において、積極的に地域の素材の教材化を行った。指導に当たっては、児童・生徒の地域への思いを把握するために事前の意識調査を実施し、この調査結果を活用して授業を行うことで、抽象的な概念を教師が把握することができ、その後の指導を具体化させることに有効であった。

教科等のねらいや指導内容と混同しないように留意しながら、意図的に地域の素材を学習内容として取り入れていくことで、児童・生徒の地域への関心を高めることができた。また、意図的・計画的な指導計画の工夫により、将来の郷土に対する展望や希望をもたせることもできた。

2 今後の課題

A・B分科会ともに、通常の授業の中で「表現力」や「郷土への思い」を児童・生徒に身に付けさせようとする時、教科等の指導内容と前述のような付加的な指導内容とのバランスをとっていくことが重要である。特に「表現力」も「郷土への思い」も個人によって状況は大きく異なり、個別の指導が大きなポイントとなってくる。したがって、単元あるいは授業の中のどの段階で指導を重視するか、少人数であるからこそ、一人一人の見取りを十分に行い、綿密な指導計画と評価計画により、適宜行うことが大切だと考える。

平成17年度 教育研究員名簿（へき地教育）

	区市町村名 地区	学 校 名	氏 名
A 分 科 会	新 島 村	新島村立式根島中学校	○ 浅野 啓一
	八王子市	八王子市立加住小学校	若松 智美
	八王子市	八王子市立上川口小学校	坪内 健一
	八王子市	八王子市立恩方第二小学校	有光 緑
	日の出町	日の出町立大久野中学校	平川 加奈
B 分 科 会	奥多摩町	奥多摩町立氷川中学校	◎ 小林 傑
	八王子市	八王子市立元木小学校	窪田 光雄
	八王子市	八王子市立恩方第二小学校	野場 志保
	御蔵島村	御蔵島村立御蔵島中学校	堀内 泰

◎総世話人 ○世話人

担当 東京都教職員研修センター 指導主事 松井 彩

平成17年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成17年度 第12号

平成18年1月16日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1974

印 刷 株式会社 今 関 印 刷